

「中進国」地域ラテンアメリカ

高橋 均

P・コリアー『最底辺の10億人』

- Paul Collier, *The Bottom Billion. Why the Poorest Countries Are Falling and What Can Be Done About It* (2007)
 - 現代世界で、その住民の貧困を改善するために国際社会の積極的関与が必要なのは、世界人口72億のうち最底辺の10億人が住む58カ国だけ
 - それ以外の国は成長しているから、ときどき危機があっても、長期的には心配する必要はない

58カ国中わずか3カ国

- アフガニスタン、アンゴラ、アゼルバイジャン、ベニン、ブータン、**ボリビア**、ブルキナファソ、ブルンジ、カンボジア、カメルーン、中央アフリカ共和国、チャド、コモロ、コンゴ民主共和国(旧ザイール)、コンゴ共和国、コートジボワール、ジブチ、赤道ギニア、エリトリア、エチオピア、ガンビア、ガーナ、ギニア、ギニアビサウ、**ガイアナ**、**ハイチ**、カザフスタン、ケニア、朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)、キルギス共和国、ラオス人民民主共和国、レソト、リベリア、マダガスカル、マラウイ、マリ、モーリタニア、モルドバ、モンゴル、モザンビーク、ミャンマー、ネパール、ニジェール、ナイジェリア、ルワンダ、セネガル、シエラレオネ、ソマリア、スーダン、タジキスタン、タンザニア、トーゴ、トルクメニスタン、ウガンダ、ウズベキスタン、イエメン、ザンビア、ジンバブエ

58カ国が嵌まっている罠

- 1. 紛争の罠(The Conflict Trap)
- 2. 天然資源の罠(The Natural Resource Trap)
- 3. 困った隣国に陸封されている(Landlocked with Bad Neighbors)
- 4. 小国における悪いガバナンス(Bad Governance in a Small Country)

「中所得国の罭」

- 他方で、折り紙つきの先進国もひとつもない
 - ひとりあたりGDPが3000～1万ドル。ここから2万ドルへもっていくのがむずかしい
 - 「後発性の利益」の枯渇。先進国との差が詰まれば詰まるほど、それ以上差を詰めるのがむずかしくなる
 - より大きな「後発性の利益」をもつ後続国の追い上げ
 - 普通の理解では、韓国と台湾は1990年代後半にこの罭に陥ったが、2000年代に脱却したとされる
 - ただしラテンアメリカの場合、その中進国としての地位を支えているのは後発性の利益ではない

定住植民地と行政植民地

- 定住植民地
 - 宗主国民が大量移住。先住民を水平方向に排除
 - 宗主国民が形成したコミュニティが「独立」
- 行政植民地
 - 宗主国民は管理者だけ移住。現地人を垂直方向に支配
 - 現地人が宗主国民を排除して「独立」
- ラテンアメリカ: その「中間型」か？

1825年の脱植民地化

- 植民地支配の二つのサイクル
 - 定住植民地（ラテンアメリカ含む）のサイクル
 - 起点：16,17世紀
 - 終点：1783年、1825年、1867～1910年に加・豪・NZ・南アが自治領化
 - 行政植民地のサイクル
 - 先駆：17,18世紀オランダ領東インド、英領インド
 - 本番：1870年代からの雪崩のような植民地化
 - 終点：第二次世界大戦後

非ヨーロッパ世界の二類型

定住植民地から独立

アメリカ合衆国
オーストラリア
ニュージーランド
(ラテンアメリカ)
(南アフリカ共和国)

行政植民地から独立

アジア
アフリカ
(カリブ地域)
(中国)
(日本)

カッコ内は准構成員(日本は安政五カ国条約下で領事裁判権あり)

パクス・ブリタニカの到来

- ボリーバルとサンマルティンの勝利の意味
 - ペルー副王軍(とメキシコ副王軍)の潰滅により、植民地にはスペインの陸上兵力がゼロとなる
 - 最強の海軍国イギリスが、このタイミングでこれ以上のスペインの遠征軍派遣は許さない意思表示
 - 最強の工業国イギリスは植民地を持たなくても、自由貿易さえ実現すれば商品売りこめる
 - 最強の海軍力によって他国による再植民地化(市場囲いこみ)を妨げる能力もある

1825年時点の独立の成果

- 独立後50年間の政情不安と経済停滞
 - しかし逆からいえば、安全保障上の課題がなかったからこそ、長々と混乱していられたともいえる
- 通商条約に治外法権（領事裁判権）なし。関税自主権あり
 - 中国・日本と違い、法体系が西洋系なので治外法権を強制される理由がない
 - 損害をこうむった外国人を救済するためには外交保護権の法理。外国艦隊がたびたび来襲
 - だがこの二つを比べれば後者の方がずっとまし

帝国主義時代の巨大な落差

- アジア・アフリカの行政植民地
 - 1870年代、後装ライフル小銃の量産化とともに猛然と植民地化が進む
- これに対してラテンアメリカ諸国は
 - すでに政治が安定した独立国
 - 第二次産業革命下の好況で、輸出部門(一次産品・鉱産物)が成長、それに牽引されてインフラ整備・経済多角化も進む
- 「ベル・エポック」(1890年代～1913年)の世界経済繁栄の余沢にあずかる

帝国主義時代の巨大な落差

- ひとりあたり国民総生産（1913年）

• アメリカ	3,722ドル（1980年の物価に換算）
• イギリス	3,065
• イタリア	1,773
• アルゼンチン	1,770
• チリ	1,255
• メキシコ	822
• 日本	795
• ブラジル	521
• 中国	415
• インド	399

— Maddison Project Database 2018 (Angus Maddison 1926-2010)

移民の世界史の構想

- 移民＝非エリートの大距離移動
 - それは本人にとって良いことであったか否か
 - [機会]マイナス[人間としての苦しみ]
 - 「近世に入ってからのアメリカの発見」という偶然
- 「所得効果と代替効果」
 - 社会の発達とともに移民はリニアに増えるか
 - リスクとコストの低下と移民以外の選択肢
 - 三時代区分(巢分かれ・広域帝国・国民国家)

参考文献

- 高橋均「『移民』と世界史」, *Odysseus* 22(2017), 21-35
- Rogers Brubaker, "Aftermaths of Empire and the unmixing of peoples: historical and comparative perspectives", *Ethnic and Racial Studies*, 18: 2 April 1995: 189-218.
- Aristide R. Zolberg, "The formation of new states as a refugee-generating process", *Annals of the American Academy of Political and Social Science* 467 May 1983: 24-38.

「巣分かれ」と広域帝国

- 巣分かれ(swarms)
 - 強い社会が、弱い社会のテリトリーに「巣分かれ」集団を送って奪う
 - 「巣分かれ」集団はそこで親社会を複製する
 - 追われた集団はさらに次の集団のテリトリーを奪う
 - 親社会と子社会は交渉を絶つ
- 広域帝国
 - 制圧した集団を追いたてない
 - 政治的服従と経済資源の供出を求める
 - 征服者と被征服者の分業に基づく広域社会組織

広域帝国(empires)

- 徙民
 - 意図的に多民族状況を作り出す
- ディアスポラ
 - 支配民族と被支配民族の間で中間管理の役目を果たす、いずれの民族にも属さない少数者
 - 広域帝国を構成する各民族集団が、お互いにミドルクラスを交換する
 - ミドルクラスは自分の民族集団よりも、他民族集団で中間管理をしていた方が万事円滑に行く

国民国家(nation states)

- 国民国家／近代化というプロジェクト
 - 領主と農民、その間に自民族の中間管理者
 - 領主にとっても農民にとっても絶大なストレス
 - 法曹(王権に依拠)と商人(都市に依拠)
- 領域内の住民のアンミキシング
 - カフェラテをミルクとコーヒーに分ける
 - いわば国民国家の原始蓄積
 - そこから、市民権と代表制政治への道が開ける

アメリカ大陸の「発見」

- 広域帝国でなく、国民国家が「発見」
 - アメリカ先住民との間の疫学的非対称
 - 第一期の〔巢分かれ〕が再現する
 - 連鎖移民原理により、イギリス、フランス、ポルトガルはそれぞれ国民国家を自己複製
 - 最も広域帝國的なスペインすら例外でない
 - 「巢分かれ」なので時期が来ればあっさり独立

ベンチャービジネスとしての征服

- 征服者はスペイン国王の命令で動くのではなく、
独立の企業家
 - ただし、まず国王の許認可をもらう必要あり
- まず探検。征服すべき××国を探し出す
- スペインに戻って国王と交渉し、「××総督」に
任命してもらう
 - 「総督」には××国で征服戦争を行う独占権がある
 - 「××総督」になった征服者は自分で資金を集め仲間を募る。国王は資金も兵力も出さない

ベンチャービジネスとしての征服

- 仲間で征服戦争を実施し、××国を制圧する
 - 戦利品のうち2割を国王への上納金 (quinto real) としてとりわけ、残りを仲間で、各自の出資金に比例して分配
 - 仲間の一定割合はこれで満足して故郷に帰る
- 残った者を市民vecinoとして△△市を設立
 - 市街地の地割りをし、更地を市民に分配
 - 周囲の耕地を分配、牧草地・山林は共有地

ベンチャービジネスとしての征服

- △△市民にエンコミエンダを分配
 - ××国を構成していた下位の首長国が単位
 - 市民は自分のエンコミエンダの先住民を動員して自分の邸宅や分譲・賃貸用の建物を建設。さらに先住民労働力を出し合って都市インフラを整備
 - いきなり移住条件の整った都市環境が出現
 - 征服者に植民地指導階級としての威信備わる
- 三点セット：国王との契約（カピトウラシオン）
＋都市＋エンコミエンダ

スペイン領植民地の広域帝国面

- コルテスやピサロなど「征服者総督」は早々に排除され、「副王」を始めとする官僚が派遣されて実権を握る。かれらのもとに各地に大規模な司法行政機構が設置され、「インディアス法令集成」にまとめられた膨大な数の法令が植民地を規制する。ラスカサス主義の援護のもとエンコミエンダの廃止が志向され、先住民社会を都市のスペイン人社会とは隔絶した空間として別個に支配しようとする。先住民をことごとくキリスト教に改宗させ、カトリック教会を先住民統制の協力者とする。ペルーのクスコを中心にインカ人支配層が存置される。移住と貿易を許認可制として貴金属を本国に吸い出す、など。